

## 中原中也「一つのメルヘン」における宮沢賢治との関わり

山口 豊  
(武庫川女子大学教育学部教育学科)

### Nakahara Chuya's Relationship with Kenji Miyazawa in “Hitotsu no Meruhen”

Yutaka YAMAGUCHI

Department of Education, School of Education,  
Mukogawa Women's University

#### Abstract

“Hitotsu no meruhen” is one of Chuya Nakahara's masterpieces that is often featured in textbooks. Regarding the formation of this poem, the composition has been said to be similar to that of Kenji Miyazawa's “Yamanashi”. However, in this paper, it is pointed out that Kenji Miyazawa's influence on terminology is significant.

#### 「一つのメルヘン」という作品

中原中也の代表作品とも言える「一つのメルヘン」は昭和13(1938)年に刊行された『在りし日の歌』の44番目に収められている。初出は昭和11(1936)年の『文芸汎論』である。

『在りし日の歌』には敬体の詩が15編ある。ただし、うち8編は一部に使われているだけで、敬体で書かれた詩は「湖上」「冬の夜」「春と赤ん坊」「北の海」「一つのメルヘン」「幻影」「春日狂想」の7編しかない。この詩集には全部で58編が収められているので、割合としては25.8%となるが、敬体のみで書かれた詩の割合は12%でしかない。

わずか12%の「です・ます」という柔らかいイメージの敬体のみで書かれた詩のなかでも「一つのメルヘン」は、ひととき異彩を放っている。それは表題の通りメルヘンの世界のワンシーンを遠くから覗いているような内容の作品だからであろう。作品自体はソネット形式の口語自由詩である。

#### 一つのメルヘン

秋の夜は、はるか  
の彼方に、  
小石ばかりの、  
河原があつて、  
それに陽は、さらさらと  
さらさらと射している  
のでありました。

陽といつても、まるで  
珪石か何かのようで、  
非常な個体の粉末の  
ようで、  
さればこそ、さらさらと  
かすかな音を立てても  
いるのでした。

さて小石の上に、  
今しも一つの蝶がとまり、

淡い、それでいてくっきりとした  
影を落としているのでした。  
やがてその蝶がみえなくなると、いつのまにか、  
今迄流れてもいなかった川床に、水は  
さらさらと、さらさらと流れているのでありました……

夜であるが陽が射していたり(第一連)、その陽がチンダル現象を見ているかのように個体の粉末であって音を立てて落ちていたり(第二連)、淡いがくっきりとした影があったり(第三連)、流れてもいなかった川床に、水が流れ出したり(第四連)と各連にわたって、ありえない情景が描かれており、中野新治の言を借りれば「この作品は現実的な条理を超えた世界によって成立している」作品である<sup>1)</sup>。

ただし、ありえないのは「現実の世界」ではそうだが、これは「メルヘンの世界」での出来事である。メルヘンを辞書で引くと、「神話・伝説に対して、空想によって作った物語」(広辞苑第七版)と記されており、やはり現実の世界ではない。何しろ、題名からして「一つのメルヘン」だと中也は断言しているのである。したがってこの世界では何が起こっても不思議ではない。

岡井隆はこのことについて、「題名の中にある「メルヘン(童話)」というドイツ語は、今では日本語になってしまっていますから、この詩の内容を〈一つの幻想的な風景〉であり、童話のように、この世ならぬ現象を歌ったものだということは、すぐにわかります。たとえば「秋の夜は、」と歌い出しておきながら、三行目に「陽は」とありますから、夜景のはずなのに「陽」つまり太陽の光が照っているのはへんだな、とおもうのですが、「メルヘン」の世界なら、どんな不思議なことがおきてもおかしくありません。<sup>2)</sup>」と述べ、現実にはありえないような風景が描かれていることについて触れている。

それにしても生活のにおいがまったくしない不思議な世界であり、さらさらとさす陽の光がスポットライトのように当たっている風景として読む人の頭の中に浮かんでくる。そんな不思議な感覚がこの詩に多くの人を魅了する原因の一つになっているのだろう。

この詩はどこかさびしげである。無機質な風景がそう思わせるのかもしれないが、すました笑顔の裏に隠された悲しみを感じさせる詩であるように思う。

小林秀雄は「中原中也の思い出」の中で「彼は悲し気に放心の歌を歌う。川原が見える、蝶々が見える。だが、中原は首を振る。いや、いや、これは「一つのメルヘン」だと。私には、彼の最も美しい遺品に思われるのだが。<sup>3)</sup>」と述べている。

虚構のメルヘンの世界を取り上げた作品は、中也の作品の中でも極めて異色である。そして異色であるがゆえにインパクトも強い。なぜ異色だと感じるのかということについて、吉田熙生が「自己を現実から遮断して「非在」の「気分」と化して行く(中略)「含恥」に始まる「曇天」「一つのメルヘン」「ゆきてかへらぬ」「言葉なき歌」と続く昭和11年の諸詩篇は、いずれもこの原初世界における幻想と倫理的意志との表現にほかならない。<sup>4)</sup>」と指摘するメルヘンの世界は、中原中也の詩の中でも一風変わった世界観を持っているからということが言えるであろう。

実は中也は、全作品の中でもう一つだけ「メルヘン」と言う言葉を使って詩作している。昭和9(1934)年12月16日の日付のある「誘蛾燈詠歌」という詩の一部「5 メルヘン」というものである。

## 5 メルヘン

寒い寒い雪の曠野の中でありました  
静御前と金時は親子の仲でありました  
すげ笠は女の首にはあまりに大きいものでありました  
雪の中ではおむつもとりかえられず  
吹雪は瓦斯の光の色をしておりました

或るおぼろぬくい春の夜でありました  
平の忠度は桜の木の下に駒をとめました  
かぶとは少しく重過ぎるのでありました  
そばのいささ流れで頭の汗を洗いました、サテ  
花や今宵の主ならまし

この詩は同じく想像の世界の出来事を描いているのだが、「一つのメルヘン」の世界観とはまるで違っている。

本稿は「一つのメルヘン」における不思議さやあいまいさについて述べるのではなく、何に着想を得てこの作品を作り出したのかということについて論じるにあたり、そこに宮沢賢治の存在が大きく影響していたことを証明することを目的としたものである。

大岡昇平は『在りし日の歌』の中で、「私はここにはあまり伝統的なものも仏教的なものもないと思う。固体のような光がさらさら射している水無河原に一匹の蝶が来てとまる。それが飛び去ったあと、こんどは自然の水が流れ出す。—これは一つのドラマであり、むしろ一つの異教的な天地創造神話ではないかと思われる。<sup>5)</sup>」と述べており、このことについて佐々木幹郎が「中原中也を衝き動かしていたのはキリスト教でも仏教でもなくて、もっと原型的な原子宗教、原始的な宗教感情みたいなものではないか。それが一貫しているように思ひまして、その近代的なおれ方の中にキリスト教が出てきたり、あるいは仏教が出てきたりする、そういう感じがして仕方がない<sup>6)</sup>」と解説しているが、私はこの「異教的」なものが宮沢賢治の世界と似たものではなかったかと考えている。つまり、賽の河原を想像させる仏教感だけにとらわれるのではなく、生への復活というキリスト教的要素をも想像させるところに、一つの宗教にとらわれず、異教的と感じさせる原因となっているのではないだろうかと考えている。仏教信者であった宮沢賢治もまた『銀河鉄道の夜』をはじめ、いくつかの作品においていろいろな宗教的な要素を想像させる表現を取り入れているからである。

## 宮沢賢治の影響について

### ① 「やまなし」との共通点

宮沢賢治は小さな谷川の底を写した二枚の青い幻燈を「やまなし」という作品で書いている。この作品は小学校の教科書にも取り上げられているイメージしやすい小品である。教科書では「五月」と「十二月」に川の中で蟹の兄弟たちの様子が掲載されている。この作品は「五月」で、蟹の兄弟が目の前を泳いでいた魚がカワセミに捕食されるのを目撃し、「死」を見せつけられるが、「十二月」で熟れたやまなしの実が いい匂いをさせながら完熟していく様子を、父蟹とともに楽しみに待つ「生・豊穡」へと場面が切り替わる構成で描かれている。

「一つのメルヘン」もまた無機質で静的な1・2連から、蝶や流水といった命を感じさせる動的な3・4連へとという「やまなし」に似た構造になっていると、中野新治が指摘している<sup>7)</sup>。さらに

「やまなし」と同じく、「一つのメルヘン」の最後にこうつけ加えられてもいいのである。  
私の幻燈はこれでおしまひであります。

という指摘をしているように、中原中也もまた「一つのメルヘン」の世界を幻灯機が映し出す映像のように遠くから眺めるしかなく、自分が中心になって感じたり考えたりしたことではない詩であることは重要な指摘となっている。

### ② 「宮沢賢治論」の記述より

『中原中也研究』第8巻などでも取り上げられているように、中原中也が宮沢賢治に影響を受けていた

ことはほぼ間違いない。山折哲雄も「中原中也は、ほとんど無名の宮沢賢治が『春と修羅』を出版したときから、賢治の存在に注目していた。賢治の詩の世界につよく惹きつけられていた。<sup>8)</sup>」と断言している。中也自身も宮沢賢治に関する文を書いて、はっきりと宣言している。(引用は『新編中原中也全集』角川書店による)

- ・この書は私の愛読書となつた。何冊か買って、友人の所へ持つて行つたのであつた。「宮沢賢治全集」(第4巻 p61)
- ・僕は彼の詩集、「春と修羅」を十年来愛読してありますが、自分が無名のために、此の地方で印刷された驚くべき詩集を、皆さんにお知らせする術を持ちませんでした。「宮沢賢治全集刊行に際して」(第4巻 p57)
- ・人性の中には、かの概念が、殆んど全く容喙出来ない世界があつて、宮沢賢治の一生は、その世界への間断なき恋慕であつたと云ふことが出来る。「宮沢賢治の世界」(第4巻 p154)

もちろん、宮沢賢治を真似ようとしたのではない。しかし、響きあうものを感じた詩人に何かしらの影響を与えたであろうことは想像に難くない。

宮沢賢治は多くの作家に影響を与えている。一例を挙げると、現代の童話作家であるあまんきみこも宮沢賢治の影響を受けた一人であり、そのことについて次のように述べている。

宮沢賢治は大好きでした。自分では意識していないのですが、影響を受けてそうするようになった、ということはあるのかもしれませんが。作品を本で読んだり、読み上げたりする中で、こうしたらこの世界に入りやすいとか、そんなふう感じたことはあつたのかもしれませんが。その意味では、今おっしゃったようなことを宮沢賢治の作品から、気づかぬままにいただいているのかもしれませんがね。<sup>9)</sup>

現代の作家ですらそうなのだとしたら、宮沢賢治論を書いた中也ならなおさらのことであつただろう。「一つのメルヘン」が収められている詩集『在りし日の歌』には「永訣の秋」という表記もなされており、宮沢賢治の『春と修羅』にも「永訣の朝」という有名な一節がある。これも単なる偶然ではないのだろうと考えている。

### ③ 「硅石」「蝶」という用語について

秋の夜の河原にさす陽は、「陽といつても、まるで硅石か何かのようで、」と書かれている。この「硅石」というのは鉱物の名称で、一般的には「水晶」や「石英」という名で知られている。

ではなぜ、中也は水晶、石英ではなく「硅石」という用語を使ったのだろうかという疑問が生じる。中也が普段から鉱物名にこだわったために一般的な「水晶」という表現を使わず、「硅石」という表現を用いたとは考えにくい。なぜなら中也の全詩作には「石」という文字を使った箇所が52件、「岩」という文字を使った箇所が7件存在するが、こうした鉱物の具体的な名称は「硅石」「花崗岩」(御影石)「雲母」の3種類のみで、あとは漠然と「石」という表現でしかないからである。

- ・御影石は、雨に濡れて、顕心的であるだろう。「夜明け」(第2巻 p414)
- ・あらゆるものは古代歴史と／花崗岩のかなたの地平の目の色。「秋の一日」(第1巻 p22)
- ・雲母の口して歌ったよ「私が貧乏で」(第1巻 p37)

散文においても「泥灰石」「大理石」の2種類のみである。

- ・冬の陽光を浴びる時、彼は壁の根元に打倒れ、泥灰石に塗れつゝ「七才の詩人」(第3巻 p56)
- ・立つてゐるのは物云はぬ大理石像、「太陽と肉体」(第3巻 p146)

このことから考えても、この詩においてあえて「硅石」を意図して用いたことにはなんらかの影響があつたことがうかがえる。その影響として宮沢賢治が考えられる。

なぜなら、宮沢賢治は詩の中にさまざまな科学的用語を多用していることでも知られているからだ。たとえば、詩集『春と修羅』の中には石の種類だけでも7種類は確認できる。(用例は『新校本宮沢賢治全

集』筑摩書房による。)

- ・過燐酸石灰のヅツク袋／水溶十九と書いてある「小岩井農場」(第2巻 p81)
- ・その質は／蛋白石、glass-wool／あるいは水酸化礬土の沈澱「東岩手火山」(第2巻 p120)
- ・向ふの黒い巨きな壁は／熔岩か集塊岩 力[強]い肩だ「東岩手火山」(第2巻 p126)
- ・白雲母のくもの幾きれ「マサニエロ」(第2巻 p132)
- ・緑青のともあれ[ば]藍銅鉱のともある「オホーツク挽歌」(第2巻 p169)
- ・白い片岩類の小砂利に倒れ／波できれいにみがかれた「オホーツク挽歌」(第2巻 p171)

また、序文は有名な一節、「わたくしといふ現象は／仮定された有機交流電燈の／ひとつの青い照明です」から始まるが、これは『注文の多い料理店』の序に「これらのわたくしのおはなしは、みんな林や野はらや鉄道線路やらで、虹や月あかりからもらってきたのです。ほんとうに、かしわばやしの青い夕方を、ひとりで通りかかったり、十一月の山の風のなかに、ふるえながら立ったりしますと、もうどうしてもこんな気がしてしかたないのです。ほんとうにもう、どうしてもこんなことがあるようでしかたないということ、わたくしはそのとおりに書いてきたまでです。」とあるように、客観的な立場で書こうとしていることを示すために科学的な用語を使っていると考えられ、中也もまた、このメルヘンの世界を賢治のいう「心象スケッチ」として書き表したいと考え、あえて「水晶」や「石英」と言わず、無機質な印象を持つ「硅石」という用語を選択したと考えられるのである。

『新編 中原中也全集』第4巻の解題篇には「『鋼青』というような同詩集中の多くの言葉に中原が魅力を感じていたことも間違いない」(同書 p46)と書かれており、ここでもあえて無機質なイメージを持つ語を選んだことも推測される。

無機質なものを連想させると言えば「蝶」もその一つに挙げられる。本来「有機質」であるはずの蝶なのに、この不思議な蝶には実体あるものとしてのイメージがない。なにしろ「一つ」と数えられているのだ。「一匹」でも「一頭」でも「一羽」でもなく、単なる個数を数える「一つ」なのである。古来、蝶は死者の魂の現れたものとして考えられていたという<sup>10)</sup>。美しいが、その美しさやはかなさゆえに死者の魂と結びつけられたのだろう。こうしたこの世のものとも思えない蝶は、生き物として「一匹」や「一頭」などと数えることはふさわしくない。やはり一つの物体として「一つ」なのである。

中村稔は吉田熙生の文を引用して「蝶」と「死」の関係を述べている<sup>11)</sup>。

「おそらく《蝶》は死後の作者自身である。しかし、そういっただけでは十分ではない。《死後の自分》という幻想を根幹として創り出された、いわば詩精神そのもの、詩魂そのものの象徴なのである」、そう書いてあります。この作品の舞台になっている河原は、中也の故郷である山口市吉敷の水無川原を連想させます。

このように、蝶が死者の魂の現れであると考えれば、宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』を思い起こさずにはいられない。ジョバンニが乗った銀河鉄道は死者の魂を天上に送り届ける汽車であった。多くの乗客たちが南十字星の駐車場で降りてゆく。ジョバンニの親友であるカンパネラも石炭袋(空の穴)の中に消えてゆく。

また宗岡卓治は「中原中也と他力、一つのメルヘンは「夜の浄土」ではないのだろうか?」という文章の中で、「蝶には何もせず自然と見えなくなり、川床に水はさらさらと流れます。生死の救いをまかせる「他力」の姿が見えます。<sup>12)</sup>」と述べているが、宮沢賢治が「他力本願」である法華思想をその作品に込めていたことはよく知られている。

「一つのメルヘン」という作品の中に死者の魂を連想させる蝶が登場することは、この世ではない世界の出来事を記述するという点において、宮沢賢治の影響を強く受けていると考えられるのである。

#### ④ 「非常な」という形容動詞について

「一つのメルヘン」を読んでいて違和感を覚える部分に、「非常な個体」という表現がある。「非常な個体」

とはどのような事を表現したものだろうか。陽は普通、光であり、我々は光の粒子を視覚的にとらえることはできない。しかしここでは、珪石のように透き通った微細な砂粒のような粒子がかすかな音を立てながら、砂時計の中を流れる砂のように降り積もっている様子をイメージさせる表現であるように思われる。つまり、「非常な個体」というのは「非常に(小さな)個体」という意味であることになる。このイメージについては多くの人の賛同を得られることであろう。

ただ、ここで注意したいのは「非常な」という形容動詞の使われ方である。一般的に形容動詞としての「非常」について、『日本国語大辞典』(1975年 第1版)では次のように記載されている。

(形動) (「常」は、なみ、普通の意)① 様子が異常であること。また、行動などが非常識であること。無礼であること。また、そのさま。\* 中右記 - 天仁元年五月二〇日「伴卿自<sub>レ</sub>本非常第一之人也。全無<sub>レ</sub>所能<sub>レ</sub>、以<sub>レ</sub>大飲<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>業」\* 今昔 - 三一・二四「何(いか)でか天台末寺の内なる木をば、心に任せて、案内も不云ずして可被折きぞ。極たる非常」の事也」\* 当世書生氣質〈坪内逍遙〉三「非常な事だと思はないで非常なことをするから奇人だらうぢゃあないか」② なみはずれてすぐれていること。また、そのさま。非凡。\* 西国立志編〈中村正直訳〉一・一一「非常の才能を発生せしむることなれば」\* 当世書生氣質〈坪内逍遙〉一一「此二ツの害があるから、非常非凡の人でなくては、重に dangerous [危険(けんのん)]といはざるを得ずだ」\* [史記 - 魏世家]「是三人者、皆以<sub>レ</sub>太子<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>非常相<sub>レ</sub>也。皆將務以<sub>レ</sub>其国<sub>レ</sub>事<sub>レ</sub>魏」③ 程度がはなはだしいさま。ひどいさま。\* 当世書生氣質〈坪内逍遙〉八「表口は非常の混雑」\* 坊っちゃん〈夏目漱石〉一「非常に失望した容子で」\* 竹沢先生と云ふ人〈長与善郎〉竹沢先生とその兄弟・一「非常な老人や子供のやうに」

とあり、「非常な個体」という表現は、「③程度がはなはだしいさま。ひどいさま。」の意味で用いられていることがわかる。ここで例に示された「非常な老人」も「非常に(年をとった)老人」という意味である。

「静かな」「賑やかな」等他の形容動詞と違い、「非常な」という形容動詞は副詞的に使用され、「非常に」という連用形で用言を修飾することが多い。口語文法において形容動詞の連体形は「大変な」「きれいな」などと「～な」という活用形を持つが、「非常」は普通、連体形より連用形「非常に」を用いることの方が多い。「非常な」という連体形は「非常に～な」という表現のその間にある用言となる部分が省略されている形と考えることができることから、形容動詞の中でも特殊な語と言えよう。

このような「非常な○○」という表現を中へは「一つのメルヘン」以外、どの詩においても一切用いていない。使用例を探せば、散文に5例見られるのみである。

- ・元来、言葉は説明するためのものなのを、それをそのままうたふに用うるといふことは、非常な困難であつて、その間の理論づけは可能でない。「河上に呈する詩論」(第4巻 p120)
- ・超現実派の詩論なぞも読んでをりますが、そして所々非常な卓見にも遭遇しますが、要するに読んだ後では「今時誰も結論には到達しないのだ」といふ何時も乍らの呟きを繰返さなければならない始末です。「近時詩壇寸感」(第4巻 p58)
- ・寺小屋育ちの祖母には、中学の学問と言ふものが、非常な大した物と思はれるのであつた。「その頃の生活」(第4巻 p216)
- ・しかし新しき男は、その後非常な勉強によつて、自分のその幼稚さを分つたらしいから、私はそれを具体的に話すことを此処でしなかつたのだ。「我が生活」(第4巻 p335)
- ・福岡の客つて、それは彼の内の親類端だつたんだが、非常なブルジョアであるのだ。「分からないもの」(第4巻 p233)

という用例が確認される。

ちなみに、程度がはなはだしいさまを意味する「大変」という形容動詞は1例、

- ・下りて来るのは大変なことだった 「或る夜の幻想1」(第1巻 p377)

副詞である「とても」は2例ある。

- ・とても高いので 僕は俯いてしまう。「秋」(第1巻 p99)

- ・とても黒々しています 「月の光 その二」(第1巻 p265)

なお、「非常に」という表現は詩の中には見られないが、散文では31例ある。どうやら中也自身は「非常に」という表現を用いる傾向にあったようである。

一方、宮沢賢治の童話作品には「非常な」という表現が11例見られる。以下に数例示す。

- ・それでも非常な水勢なのだ。「あけがた」(第12巻 p268)
- ・でんしんばしらはもうみんな、非常なご機嫌です。「月夜のでんしんばしら」(第12巻 p81)
- ・ある年非常な饑饉が来て、「二十六夜」(第9巻 p154)
- ・女王のテクラが、もう非常な勇気で云いました。「ひのきとひなげし」(第11巻 p213)
- ・今日はここへ非常なえらいお方が入らっしゃるんだから此処に居てはいけないよ。「二人の役人」(第9巻 p115)
- ・私は又この前のお方に百四十年前に非常な貸しがあるので「ペンネンネンネンネン・ネネムの伝記」(第8巻 p326)

なお、賢治は「非常に」という表現を29例用いている。「非常な」と「非常に」の使用数は、「非常な」11例、「非常に」29例であり、「非常な」という表現が多く用いられていることがわかる。中也が詩には用いず、散文でも36例中5例しか「非常な」という表現を用いていないにも関わらず、「一つのメルヘン」で「非常な」という表現を用いたのはかなり特殊なことであったことがわかる。それは中也が賢治の表現に強く影響を受けていたからこそ、こうした言い回しを用いたのであろう。

#### ⑤ 『夜汽車の食堂』と『銀河鉄道の夜』の共通点と相違点について

中也は宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』に刺激を受けたのか、同じように夜空の星に向かって突っ走る夜汽車を舞台にした童話を書いている。それが昭和10(1935)年に書かれた『夜汽車の食堂』という作品である。

この作品については『新編中原中也全集』第四巻の解題編に記載があり、「本篇が宮沢賢治の童話に触発されたことは間違いあるまい」(第4巻 p453)と書かれている。また、『中原中也研究』第8巻において、いいだももは、「あの鉄道はぼくの読み方によれば一方通行であって「行く」だけなんです。「帰って来る」ということはないんです。だからあの切符はどこまでも「行く」切符であって、「戻って来る」切符ではない。一方的な切符だけでどこまでも行ってしまふ」(同書 p48)と述べ、中村稔は、「明らかに「銀河鉄道の夜」に触発されて書いたに違いないのですけれども、一面では星のほうへどんどん行くということが途方もなくつまらないことのように思われるという、中原のある種の宮沢賢治批判というか、気質の違いというようなものが出て来るのです。」(同書 p35)「中原のほうはつねに生活のほうに戻っていく。宮沢賢治のほうはつねに生活に行かない」(同書 p38)と述べて『夜汽車の食堂』と『銀河鉄道の夜』との相違点を指摘している<sup>13)</sup>。

その他、『夜汽車の食堂』と『銀河鉄道の夜』をシチュエーション、乗客、旅の目的、食べ物の記述、記述の立場という点において比較すれば、次のような表にまとめられよう。

表1 『夜汽車の食堂』と『銀河鉄道の夜』の観点別比較

	『夜汽車の食堂』	『銀河鉄道の夜』
シチュエーション	夜に走っている汽車の食堂車の中	夜に走っている汽車の客車の中
乗客	ボーイとアメリカ人女性のみ	カンパネルラ、カオル、タダシ、等大勢
旅の目的	記述なし	本当の幸せを求める
食べ物の記述	レモンをかけすぎたお魚フライ	よい香りのするリンゴ、鳥の形をした砂糖菓子
記述の立場	現実的	幻想的

『銀河鉄道の夜』でジョバンニが乗った汽車は、死者の魂を乗せて本当の幸せへと向かって進むという

(山口)

目的のある方向へ向かう汽車である。

一方、中也も不思議な汽車に乗るが、こちらはただ「ゴーツと音を立てて」突き進むだけで、どこへ向かう、何のために向かうという目的を読み取ることはできない。さらにお魚フライを美味しく食べており、生への意欲すら感じられるところも大きく違っている。

思うように文名は上がらず、つまらない毎日を送っていた中也は、不思議な汽車の食堂車で美味しいお魚フライを食べて、つかの間の幸せを感じている。しかし、突然現れたアメリカの小母さんに、わけもわからず怒られることになり、その幸せな気分は一気に吹き飛んでしまい、目を窓の外に転じて逃げようとする。しかしその先に見た夢は、幸せの続きではなく、つまらないと感じていた日常の何気ないいつも通りの毎日の生活の夢である。ここからもどうしても日常生活から脱却しきれない中也の苦悩が読み取れる。この苦悩は『銀河鉄道の夜』の話を知る者にとっては一層鮮明に感じられる。

このようにいくつかの違いは確かにあるが、やはり『銀河鉄道の夜』を意識した作品になっていると言えよう。

## まとめ

本稿は、「一つのメルヘン」という中也の詩の中でもひとしお変わった世界を持つこの詩が、オリジナルな発想で作られたのではないと主張したいのではない。理屈で説明できない不思議な世界は、ダダイズムに傾倒したことのある中也の心の中の世界であり、風景でもある。その無機質で静かな世界に変化をもたらす出来事がきっかけとなって、「静」から「動」へ、「死」から「生」へと視点が変化している。そしてその変化を通して秋の夜が更けてゆき、新しい一日を迎えることを予感させている。この変化はわずかな変化かもしれない。しかしそれまで「さらさら」と陽のさす音しかなかった世界に、生命の源である水の「さらさら」と流れる音が加わったのである。このことに読者は「明日への希望」を見出していると言えよう。

ただ、この他に類を見ない独特の世界観の構築には、宮沢賢治の影響がかなり大きかったのである。そのことは、これまでに論じられてきた「やまなし」との比較だけでなく、「珪石」や「非常な」という用語の使い方からも証明できると考えている。

## 参考文献・引用文献

- 1) 中野新治。「中原中也「一つのメルヘン」成立と宮沢賢治」。『宮沢賢治の磁場』。翰林書房、2018、p359。
- 2) 岡井隆。「中原中也の詩を読む」。『中原中也のこころ』。佼成出版社、2004、p87。
- 3) 小林秀雄。「中原中也の思い出」。『人生について』。中央公論新社、1978、pp76-77。
- 4) 吉田熙生。「中原中也」。『日本現代詩辞典』。桜楓社、1986、p364。
- 5) 大岡昇平。『在りし日の歌』。講談社、1967、pp260-261。
- 6) 佐々木幹郎。「対談 中原中也の魅力」。『国文学 解釈と鑑賞』。1989、第54巻9号、p20。
- 7) 中野新治。「「一つのメルヘン」成立に関する一考察」。『日本文学研究』。梅光女学院大学、1988、第33号、pp97-109。
- 8) 山折哲雄。「悲しみの風」。『中原中也のこころ』。佼成出版社、2004、p18。
- 9) あまんきみこ、長崎伸仁、中瀬正堯。『あまんきみこと教科書作品を語らう』。東洋館出版社、2019、p35。
- 10) 不二龍彦。『迷信俗信大百科』。学習研究社、1996、pp44-46。
- 11) 中村稔。『名詩鑑賞 中原中也』。講談社、1979、p145。
- 12) 宗岡卓治。「中原中也と他力、一つのメルヘンは「夜の浄土」ではないのだろうか?」。『中原中也の會 會報 48』。中原中也の会事務局、2020、pp6-7。
- 13) 『中原中也研究』。中原中也記念館、2003、第8巻、pp30-52。

受理日 2020年12月23日